

実習報告（基盤教育実習）

異質な他者との学び合いの授業開発

大江 恵暉（授業実践探究コース）

1. 探究実習のテーマと設定の理由

現行の学習指導要領で体育授業における課題として、運動に積極的に関わる子どもと関わらない子どもの二極化が指摘されている（平成20年中教審答申）。また、平成30年改訂の新学習指導要領においても同様のことが述べられている。そこで、問題を解決するために梅澤（2016）は「多様な他者とのコミュニケーションが求められている」と述べている。また、オリンピックなどには、男女が一緒に取り組む団体競技が追加されるなど、スポーツの世界においても、インクルーシブな視点を持つことが望まれている。

梅澤（2016）が定義する体育授業における学び合いは、①主体的に取り組んでいるか②仲間と対話的に取り組んでいるか、③学習対象を深く学んでいるかである。このことから、能力に関わらず、一人一人ができる、できないの葛藤を楽しむことが大切であり、グループにおいて技能や戦術を能動的、協働的、創造的に学び合うことができる授業開発を目指す。現在の体育の授業では、グループに分かれた学習形態がよく取り入れられている。その際には、同じ程度の子どもの構成するグループで行う能力別学習が使われることがある。鈴木ら（2015）は、「能力別学習は、教師が班ごとの指導がしやすくなるメリットがある。しかしながら学習者の技能に視点を置き班を編成するために、とくに技能レベルの低い班に位置づけられた生徒は劣等感を抱きやすく、学習意欲は減退する恐れがある。さらに、能力別学習では、班内のコミュニケーションは問題とされないため、班内の生徒相互の教え合いや学び合いは難しい。」と述べている。そこで私は、能力の違う異質グループで学習を行い、1つのチームとして取り組んでいくことで、協働的な学びが生まれるのではないかと考えた。現在も体育の授業において、学び合いの授業は多く取り組まれている。しかし、その中には生徒に主体的に取り組ませることに重きを置き、教師は遠くから活動を見守るといったものもある。梅澤

（2016）は、この状況を「放任的な授業」としている。また、対話活動が行われている場面において、能力の高い生徒が自分の意見を述べ、能力の低い生徒は自分の意見に自信を失い、発言できないまたは聞き入れてもらえない場面もある。放任的な授業だけでなく、このような状態の対話活動では本当の学び合いの授業ではないのではないかと考える。

また、異質な学習集団でグループ学習を行う際、教師のコーディネート能力が問われる。梅澤（2016）は今求められる教師の「教え」（教育方法）でまず必要なのは、①能動性・自立性（主体的に学ぶ）②協働性（仲間と対話的に学ぶ）③創造性（新たな世界を広げる、深く学ぶ）を発揮させる授業（単元）デザインだと述べている。つまり、生徒が活発に議論できる場の工夫やものや道具の工夫、内容を多くの授業に参加することで検討していきたい。

2. 探究実習の研究目標

基盤教育実習の研究目標

- ①実習校の体育の授業の特徴、学校の特色を理解する。
- ②対話活動を取り入れた授業に積極的に参加し、生徒の現状を把握する。
- ③評価の観点を具体化していく。

3. 探究実習の概要

□実習校の体育授業の特徴，学校の特色を理解する。

研究する対象は，佐賀市立N中学校(以下，実習校とする)の生徒である。探究実習では，メンターやその他の体育教員の授業を参観した。また，自分が教師として体育の実技授業を行った。その際には，実習校が取り入れている教科書，ワークシートを使用して行った。

□対話活動を取り入れた授業に積極的に参加し，生徒の現状を把握する。

奈須(2017)によると，授業における対話活動の有効性について「一人一人のそれぞれに偏った知識や経験を共有の財産とし，その豊かな具体・特殊・個別の先に抽象・一般・普遍を構築しようと対話的に思考することに意味がある」と述べている。このことから，実習校の体育の授業における対話活動がグループ全員の意見を共有の財産とするような場になっているのか，最終的に一つに再構築することができるのかを検討した。

□評価の観点を具体化していく。

対話活動を取り入れた授業で評価を行うにあたって，対話活動中の発言や態度など，最終的な筆記テストや実技テストでは図ることのできない部分が多くある。そういった点をどのようにして評価するのかを具体化しくために取り組んだ。

4. 探究実習の成果と課題

①成果

私が考える「異質な他者との学び合いの授業開発」では，対話活動に大きな重点を置いている。奈須(2017)は，対話活動が「生涯にわたって学び続ける力，主体的に考える力を持った人材の育成につながる」と述べている。その際のテーマとしては「子どもが持っている知識を活用することが重要である」とある。また奈須(2017)は，「子どもたちが持っている，断片的な知識を対話によって洗練させたり，統合させることを導けるような意図を持った教師の指導が大切である」と述べている。今回の実習では，毎時間のはじめとおわりには，チームでの対話活動を取り入れていた。2年次の学校課題探究実習を行うにあたって，対話活動を経験し，どのようにおこなっていけばよいかを生徒が理解していることは，大きな成果である。しかし，目的で述べた能力の高い生徒の意見が通りやすい現状があった。

□課題

1. 授業実践からの課題

現在，担当教員が持っている授業，実習日の関係から，3年生の授業を中心に参加した。実習校の体育の授業の形態としては，あまり変わることはないが，研究対象である1年生，もしくは2年生との関係性があまり築けていない。また，現状把握という点でもあまりできていない。授業開発を行うにあたって，大きな課題である。今後の時間を有効に使い1年生，2年生の授業に参加することにより，解決していきたい。

2. 自身のテーマとの関連

主体的で対話的で深い学びに導くには教師からの発問がとても重要である。効果的な発問を作成することはこの研究を進めていく中で大切な点である。また，対話活動を取り入れた際の評価の観点が，あまり明確にすることができていない。授業を行うにあたって，指導と評価は一体であるため，これからしっかりと具体化していきたい。